

賀状

遠藤 芳子

五年前、息子が不慮の事故で亡くなった。息を引き取ったのは、事故に遭遇してから一週間後、五月初旬、若葉の季節だった。以来、連日悪夢の続きを見ているようだった。新聞もテレビも見なかった。いや、眼に入らなかった。見る気力が無かった。何がどうなっているのか判然としなかった。泣くことさえできなかった。夜は精神安定剤と睡眠導入剤で眠ることを心がけ、それでも眠れずボーっと過ごしていた。

タイミングが良いのか悪いのか、折から四歳の孫育てを担わなくてはならない状況にあった。緊張を強いられ、疲労困憊。消耗する一方で、生きる支えになったことも事実であったのだが。

事故は、雨の朝の出来事だった。当日、駆けつけた病院で待っていたのは警察署員、うるたえている親への事情聴取だった。

息子が乗っていたのは新品同様の自転車、しかも自転車としては高額、販売した会社が所在する県の警察への防犯登録であったことから、窃盗を疑われての聞き取りであった。

都内全域の警察に問い合わせたが防犯登録は無い。全国の警察に網をかけてようやく判明したとのこと（親に聞いてくれれば、すぐ分かったものを）。

息子から、自分への褒美として高額だったが思い切って買ったこと、ネットでの購入契約とともに、販売元の所在地である県警へ防犯登録したとの自慢を聞いて間もなくのことであった。新品同様は当然のこと、まだ十八日しか乗っていない自転車だったのだ。

「正義感の強さとバカ正直が玉に瑕」と言われ続けてきた息子に、生涯の土壇場で信じられない嫌疑をかけられるとは。怒りより笑いたくなくなってしまいうような出来

事であった。

手術は始まっていた。警察署員の対応を気にする余裕はなかった。「気が済むまで警察でお調べください」とお引取り願う。現場検証などの実質的な調査は、翌日から始まると聞いた。

救急救命士の話では、身体の左側を下にして細い道路の真中辺へ倒れていたとのこと（通勤に使っていた道路である）。左側の頭と手に、倒れた際に付いたと見られるかすり傷があるが、致命傷は右耳の後ろの傷。意識が戻ることは無いが、緊急手術が必要である、と。

術後、担当医から告げられた言葉は「鉄の棒とか、金属バットの様な物がぼつちり入ったと思われるような傷で、手につけられない状態でした。今夜いっぱいもつかどうか分からない。知らせるべき人には至急知らせてください」。

一体、何が起こったのか、何が当たったのか。何故右側か、どのようにして致命傷になるような深い傷がついたのか。激しい雨が全てを洗い流したのか、とうとう何も分からなかった。永遠の謎として、今も私の胸に残っている。

交通事故目撃者探しの立て看板が出ていた、と息子の友人たちから聞いた。警察からは五ヶ月の間、倒れていた場所さえ明確に知らされることはなかった。

警察署員には、亡くなったら直ちに連絡するように言われていた。亡くなった日の早朝四時過ぎに電話を入れる。

病院側から、なるべく早く霊安室を空けるようにと言われたため、何度も警察へ催促した挙句、物々しい服装で署員五名が到着したのは、午後三時過ぎ。息を引き取ってから、ほぼ十二時間近く経ってからであった。

明確に分かったことは、唯一つ。息子は亡くなった、どんなに泣いても喚いても再び会うことができないという事実だけ。一週間ほとんど睡眠をとることは出来なかったこともあり、思考力は零に等しかった。友人夫妻が警察署員へ、「その言い草は何だ。失礼じゃないか。人一人亡くなっているんだぞ。」と怒鳴っている様子を遠い出来事のように聞いていた。怒る気力も失せていた。

十月一日、警察署の車が迎えに来て、ようやく倒れていた場所を知った。同じ場所には既に、九月に起こった交通事故情報を求める立て看板があった。とにかく交

通事故の多い場所柄から、警察の方々の苦勞も分からなくはない。だが、倒れていた場所を見て、何故右後頭部の傷なのか、どう考えても合点がいかなかった。署員は、交通事故ではよくあることと断言したが、あまりにも色々あったため、警察への不信感を払拭することは出来なかった

息子が亡くなった年の暮れまでは、結構時間があつたはずである。年末を迎え、気分だけは慌しくなり、交流のあつた方々へ、とりあえず、喪中葉書を出した。実は、本当に出したかどうか、おぼろげにしか浮かんでこない。夢の中の出来事のようにだった。

その時点で、翌年から年賀状はもう書けないと思った。何が嬉しくて、おめでとうゝなのかわからない。到底書けない、と。

翌年の暮れ、なんとなく急きたてられる気分で年賀葉書を買った。だが、どうしても書く気力が湧かない。とうとう元旦になった。

元旦に届いた賀状を見て、世の中まだ捨てたものじゃない。賀状を書かなくては、と気力を奮い起こした。

届いた賀状の中には、息子の月命日に欠かさず墓参り（納骨までは、毎月自宅へ立ち寄ってくれた）をしてくれる息子の友人からのものがあつた。冷たい缶ビールや温かい缶コーヒを季節に応じて月替わりで供えてくれる。その上、親が行くことを知っていて、花立てを洗い、水を張っておいてくれる。水場が遠いというほどのことはないのだが、老いの身にはとても有難い。

まだ現役バリバリの年齢。月命日は休日ばかりではない。平日に当たる月は、出勤前にお参りをしてくれる。家から近いとはいえ、出勤とは反対方向へ。気持ちはあつてもなかなかできることではない。賀状一枚出さずにはいられない、そう思った。

息子の祥月命日には必ずカラーの花束を贈ってくれる私の友人、美術館や公園、映画などの計画を考えては誘い出そうとしてくれる友人、折に触れてメールなどで励ましてくれる友人、半身不随でホームへ入居した若い頃お世話になった先輩、老介護で疲れている友人、病気を伴侶としたかのような寂しがりやの友人、丹精こめて育てた季節の野菜を送ってくれる故郷の後輩等々の賀状があつた。

孫育てに追われ、折角誘われても断らざるを得なかったり、不意の用で断念せざ

るを得なかつたりと、会う機会はめつきり減ったが、数年会わなくとも会えば昨日の続きのように話が出来る大切な人たちだ。定年を機に儀礼はやめて賀状を減らし、息子の死を機にさらに減らしたが、せめて賀状一枚でも出しておきたい人たちがいる。そう思ったとき、有難いことだと思った。

だが、いざ年賀葉書を前にすると、常套句の「新年おめでとうございます」「明けましておめでとうございます」がどうしても書けない。死ぬほど辛いと思った年もあったにもかかわらず、何気なく使えた過去はあるものの、比較にならない辛さを思い知った身には眩しすぎる言葉になった。

自分の気持ちと折り合いをつけ、常套句の一つである「迎春」を使ってみたが、他に何も書けず、思いを込めて宛先だけ自筆にした。それだけで精一杯だった。

神社への初詣も気持ちの枷があつてできなくなった。神社、仏閣に限らず、石仏等々、通りすがりに手を合わせることは多くなったのだが……。

過つては、ただ真つ白な心で掌を合わせていた。願い事も、お礼の言葉も心の中でさえ眩いたことが無かった。

最近はお気がつけば「どうかあの子が、元気で無事に暮らしていますように」と心の中で呟いている。喪つた子の無事を祈るとは、他者が聞けば可笑しなことだろう。

歳を「数え」で使っていた時代がある。最近知った話だが、「新年おめでとうございます」の常套句には、この世に生を受けた者同士一斉に歳をとる元旦に「おめでとう」と言い交わす意味が込められていたという。

十二月三十一日に生まれた子が、元旦にはもう二歳と言う不合理があり、満年齢で歳を数えるようになった。なるほど、この世に生を受けた者同士、奇跡の巡り会わせを祝う意味があるとは、知らなかった。

最も親しい親子と言う絆で結ばれていた息子。たった一枚で良いから賀状を出しておけばよかった、と痛切に思った。我が子というだけで、一枚の賀状さえ出したことが無かった。正月に会わなくとも、半年、一年会わなくとも、何かあれば会えると高をくくってきた。親子と言う奇跡をあまりにも当たり前のこととして享受してきた。親の私に甘えがあった。

息子を喪ってこの方、声も聞けず、姿も見ずにどう時をやり過ごしてきたのか我ながら不思議な気がする。今後、どう耐えていけばよいのか分からない。生かされている間は、なんとしても生き抜かなくてはならない、生きていることに価値がある、と自分に言い聞かせる。

時折物狂おしさに襲われる。人に知られないように気をつけてはいるが、嗚咽を漏らしている自分に気がつくこともある。歳をとると時間が早く過ぎていくと言う実感がある一方で、息子の死後、時がひどくのろのろと進む。時が止ってしまったかと思えるときもある。息子の笑顔が昨日のように思える。すぐ傍にいる気がする。「おふくろ！」と言って戻ってくる気がする。相反する感覚が心の中に同居しているのだ。

東日本大震災で子どもを亡くした親に、「三年経って、少しは癒されましたか」と聞いたりポーターがいる。「子どもを亡くして癒されることは無い」と答えた父親がいた。

私も、「三年経てば癒され、落ちつきますよ。時間の経過を待つしかない」と親を見取った幾人かに言われた。「スマイル、スマイル、必ず乗り越えられます」、繰り返し「頑張って。前向きに。」とも。

また、数人の方々に「東日本の大災害で苦しんでいる人たちのことを考えたら、お子さん一人亡くしたぐらいで、悲しんでいては申し訳ないですよ」と励まされ（？）もした。これ以上どう頑張ればいいのか、と、言われれば言われるほど落ち込んだ。いずれも、ご自分のお子さんとは、見えないところでの葛藤はあるかもしれないが、今のところ安全地帯にいる方々である。子に先立たれた親の多くが、三年や四年で喪失感から逃れることは、到底出来ないだろうと私は思う。

大津波で肉親を喪った方々は、著名人がボランティアとして駆けつけ、一瞬癒される刻を持てたとしても、または感謝はしても、それで喪失感から脱出できたと言うには程遠いというのが実情ではないだろうか。

私には子どもを亡くした親に、「癒されたか、乗り越えたか」と聞くことは出来ない。酷過ぎる。見えない放射能に怯えて暮らす人にかける言葉とは思えなかった。一緒に涙することはできる。「悲しむだけ、悲しんでください。喪ったお子さんを忘れないで覚えていてあげてください。それが残された親の務めかもしれませ

ん」と言うこともできる。無理に笑顔を作らずとも、ありのままでもいい、と思うのだ。東日本大震災からたった三年で、乗り越えて当たり前、原発再稼動・原発輸出を容認して当たり前、前向きに生きていると笑って見せて当たり前、何時まで甘えているのか、と強者の理屈が幅を利かせる風潮が蔓延っている。前向きに笑顔で生きる人でも、時には人知れず涙を流すことがあるかもしれない、と思わないのだろうか。

亡くなる前年の秋、原発事故は必ず起きる。三、四年以内に、と確信ありげに予言めいたことを言っていた息子を思う。

私の日々の暮らしは、不器用で無様な生き方のまま。笑ったり、喜んだり、怒ったり、些事に振り回されたり、寝込んだりしながら過ぎてゆく。

今でも賀状の季節が来ると思う。亡き子に宛てて賀状を出したい、と。今なら躊躇なく「新年おめでとう。生まれてきてくれてありがとう。この世で四十三年間生きてくれてありがとう。沢山の幸せをありがとう。元気になっていますか。決して忘れないからね。」と書く。宛先の書けない賀状だ。

遠藤 芳子

一九四〇年 生まれ

東京都狛江市在住

「詩都」同人

「地平線」同人